

短編小説 『いつもと変わらない……』 white

caps

###

淳は無言でパイプイスに座っていた。部屋にかかっている時計の針がコツツ、コツツとなる。窓の外はもう暮れかかっている、鳥が二羽、夕暮れの空を飛んでいった。淳はうつむきながら何も載っていないテーブルの上を見つめている。この状態のままもうどれくらい時間が経つただろう。テーブルの反対側のイスには、「テイルスポーツ」と書かれたバッグが置き忘れてあった。

ちぎももとあつし

崎本淳はある学校に通う高校2年生。――小学生の時に親は離婚している。淳が小学生になる頃に

はもう両親の仲は悪く、二人とも淳のことは育てないと決めていた。必要な生活費は母親のほうから毎月きちんと送られてくるが、今は淳は誰も頼らずに一人で暮らしていた。

共に暮らす家族こそいない淳だったが、学校では普通に生活していた。友達もいれば、部活にも入り、勉強もそこそこで、委員会もやっている。クラスメイトとは普通に話すし、冗談を言い合ったりもする。

そう、ごくごく普通だ。

一人で過ごす家の中での時間だって、決して孤独に苛まれる時間ではない。淳は自分が一人で暮らしていることを受け入れていたし、とつくにその

ことに慣れていた。

ただ、そんな淳にも悩みがいろいろとあった。そのうち一つは野球のことだ。淳は高校になってから野球部に入り野球を始めたが、2年になった今でもあまり上達していなかった。まわりはみんな中学の頃からビシビシ練習してきた人ばかり。淳は体力はあるし、運動のセンスがないわけではなかったが、未だまわりのレベルについて行けてないと感じることが多々あった。この前の練習などでは外野フライを捕ろうとして球が顔に直撃し、ベンチで治療を受ける始末だ。部室で皆が打ち上げの相談をしているときに、淳は鼻血を抑えるので精一杯だった。

それから、学校生活でも、些細な失敗がいろいろ

とあり、それが淳の気分をより鬱屈としたものにしていった。たとえば淳は図書委員だったが、一昨日などは図書室を最後に出るときに施錠を忘れ、昨日になつて図書委員が仕事をしに図書室に来たときには中がめちやくちやに荒らされていた。そのためその日は図書委員を放送で呼び出してまでして総出で本を整理しなおした。もちろん誰も淳のことを口に出して非難したわけではない。しかし淳は、自分のせいでそうなつたのだと思わずにはいられなかつた。そして淳はもやもやしたものを心に抱えながら、そのまま連休に入った。

——時計の針はもう7時を指している。ずっと淳は待っているが、未だこの部屋に現れるものはない。季節は春になつたばかりでまだ日は短い。外は先ほどの夕暮れも姿を消しもうすっかり暗く

なっている。木立の隙間からオレンジ色の街灯がポツポツと見えた。

今淳がいるのは水泳教室が入っているスポーツセンターの建物の一角。「テイルスポーツ」という名前のスポーツセンターだ。今は野球部に入っている淳だったが、中学の頃は水泳をやっていたのだ。淳はそこら優秀な水泳選手だった。学校ではもちろん、強者揃いの水泳教室でも常にトップクラスの記録を出していた。将来を囑望された、そんな時期が淳にもあった。淳は一生この競技で身を立っていかうと決めていた。

そんな時期にあの事件は起きた。いや、「起こしてしまった」。

その日、淳はテニススポーツの仲間たちと共に、水泳の競技会の団体競技に出場していた。出場する仲間はテニススポーツで知り合った旧知からの知り合いで皆とても仲が良く、気の置けない友達ばかりだった。今回は4人でメドレーを分担して泳ぐという競技だったが、淳たちの所属するテニススポーツのチームは優勝確実と言われる、観客からも注目の的だった。4人にとってこの競技会は今までの練習の集大成になる大事な大会だった。

その時4人は着替え室で着替えをしていた。——着替え室から奥の階段を下りれば、プールはもうそこだ。

その一緒に着替えていた4人の中に横山龍太とい

う友達がいた。横山はとにかくヌメヌメしたものが大嫌いで、納豆も食べられずナメクジやカタツムリもこれでもかと言うくらい苦手。その日たまたま会場に来る途中でカタツムリが草の上に乗っているのを見つけた淳は、横山のことをからかつてやろうとカタツムリをつかまえて会場に持ち込んだ。それが全ての間違いの始まりだとも気づかずに。

皆の着替えが終わろうかと言うとき、一足早く着替え終わった淳は、横山の目の前に持っていたカタツムリを突きだした。

「ウアッ」

カタツムリを見た横山はたじろいだ。横山はそのまま着替え室の奥の隅に逃げる。急に動かされた

カタツムリは目を引つ込めて慌てたように淳の腕の上をヌルヌル動いた。

「どっから持ってきたんだよおまえ気持ちわりー」

「ハハハ、龍太のやつそんなにカタツムリ苦手なのかよ」

一緒に着替えていた仲間たちも笑う。

「や、やめてくれよお」

しかし自分がふざけすぎていることに気がつかないかった淳は

「おまえ、こんなカタツムリくらいかわいい程度だろ」

着替え室の奥の横山に近づいて行って、さらに横山の目の前にカタツムリを突きだした。

「おい、やめてやれよ」

仲間の一人の丸林が抑止する言葉を言ったが、淳

はやめない。横山はもう泣き出しそうになり、着替え室の通路の奥まで逃げ出した。

「全然怖くなんかないじゃん。ほれ、ほれ」

そして怯える横山のことも構わずに、歩み寄った淳が無理矢理カタツムリを横山の体に触れさせたとき、横山は思わず一步後ろに後ずさりした。

階段を踏み外した横山の体は宙を舞った――。

横山は大きな音を立てながら階段を転げ落ち、階段の一番下、ちょうどプールに開けるところまで落ちた。プール中が横山のほうを振り向き、声を呑んだ。いきなり階段から人が落ちてきたのだから当たり前だ。

「大丈夫か!？」

「おい、救急車!はやく!」

着替え室にいた仲間たちも階段を駆け下りて横山のそばに走り寄る。

「龍太、龍太！」

横山は一言も言葉は発さずただ「ウウ、ウウ」とうなるだけだ。階段にこすつたときに出来た横山の体の傷からは、血がにじみ出していた。淳はその様子を階段の上から見下ろしながら、言葉もなぐただ自分がしてしまったことの大きさに恐れおののいていた。

その後横山は救急車で病院に運ばれた。しかし横山は階段から落ちた際に腰骨を強打しており、下半身不随になってしまっていた。そして結局競技会のほうはテイルスポーツチームは出場するところが出来ず、4人が待ち望んでいた優勝の二文字は、遥か遠くに崩れ去つたのだった。

その後淳は仲間から強く非難された。「おまえの
あんなくだらない悪ふざけのせいで、俺たちは優
勝どころか出場して記録を残すことすら出来な
かったんだ——！」と。そして淳はそれ以来水泳
をやめた。もう自分にとって水泳は許されないス
ポーツなんだと、仲間を傷つけた自分が水泳を続
けていけるわけがないと、淳はそう思った。

リハビリをしてじき退院した横山は、その後障害
者スポーツとして水泳を再開し、テイルルスポー
ツの選手が出場する地区としては輝かしい記録を
いくつも作った。そして今でも水泳を続け、この
テイルルスポーツセンターで水泳に励んでいる。
今日淳がここに来たのも、横山に会うためなの
だ。

あの日、横山が淳が原因の事故で下半身不随になつた日付は、必ず皆がこのテイルルスポーツセンターを訪れる、4人にとって特別な日になつていた。しかし、淳だけは横山に会うことは叶わなかつた。メンバーの誰もが淳を歓迎せず、淳が横山に会うことを許さなかつたのだ――。

ガチャツと音がして部屋のドアが開く。淳が顔を上げると、一人の男子高生が入ってきた。その男子高生はあの時の4人のうちの一人、丸林だ。

「――また来やがつたのか崎本。どの面下げてここに来れんだ、おまえは」

丸林の言葉に淳は無言で顔をしかめた。

「龍太のやつは、おまえには会いたくないって言ってる。帰んな」

「横山がそう言ったか……？」

「同じ事だ」

丸林はまた厳しい口調で言う。

「俺は、あのことは悪いと思ってる。俺は調子に乗りすぎてた。でももう何年も前の話だ。まだ俺は許されないってのか……？」

「何年も前だと？」

丸林はいかつた。

「いいか、龍太のやつは今でも下半身不随なんだ。時間が経つたってそれは治りやしない！ おまえは俺たちの大事な競技会をおじやんにして、そして龍太のやつを『今でも』苦しめてるんだ！——誰もおまえのことなんか許しやしない。誰もおまえのことなんか認めやしないんだ！ わかつたら、とつとつここから去るんだな。」

丸林はそう言い捨てると部屋を出て行く。ボタンと扉が鳴った。淳はしばらく厳しい表情のままテーブルを眺めていたが、横のイスに置いていた荷物を引つ掴むと、部屋の電気を消して先ほど丸林がでた扉から廊下に出た。電気が落とされた廊下には、もう丸林の姿は見えない。ただ、火災報知器の赤いランプだけが、暗い廊下に光っていた。

テイルススポーツセンターの建物から出るまでの途中、淳がプールを窓越しに見ると、プールではたくさんの人が泳いでいた。そしてフロアの奥にチラツと車いすが動いているのが淳の目に見えるが、しかし淳は首を振って車いすから視線を離すとフロアーを素通りし、建物の外に出た。

外の風はまだ冷たい。淳はその寒風の闇の中を、一人帰って行つた。



次の日の午前、淳は街角の商店街を人込みに紛れて歩いていった。家の近くの商店街で、ここら辺の人はよく使う商店街だ。昨日の天気とはうって変わって、暖かい。空は晴れ、ヒツジ雲が浮かび、太陽の光を浴びて商店街の花壇の花が輝いていた。遠く、飛行機雲が伸びていく。

そして淳が目を路上におろすと、見慣れた顔が目に入ってきた。

（あいつ、何してんだ？）

だてひであき

それは野球部で一緒に同学年の伊達秀晃だった。

伊達は一人で路上の真ん中に自転車にまたがって立ち、荷物を肩に掛けたまま盛んに辺りを見回している。時計も気にしているようだ。淳が立ち止まっつてその様子を観察していると、ちようど振り返つた伊達が淳の存在に気づいた。

「よう、淳。一番乗りはおまえか」

「おまえこんなところで何やってんだ？」

「なにつて、野球部の打ち上げの待ち合わせじゃないか。おまえ、連絡もらつてなかつたか？」

そう言われてようやく淳は思い出した。休みに入る前に野球部で打ち上げをやるとか言つていた。あれのことか。すると伊達が怪訝そうに聞く。

「おまえこそそんな深刻そうな顔してどうしたんだ？　まるで塾でクラスを一つ下げたつて顔してるぜ」

そう言われて淳はハツとした。そう、淳は伊達に

言われてようやく自分が陰鬱な顔をしていたことに気がついたのだった。淳が一瞬無言でいると、伊達は笑うのをやめて淳の顔をのぞき込んだ。

「なんだ、おまえ、マジでなんか問題抱えてるな。よし、相談事なら乗ってやるぜ。」

「いや、なんでもない」

「まーまーまーまー、とにかくそこ座って」

それからしばらくの間、淳と伊達は話をした。淳はあの水泳教室でのことは一言も言わなかったが、その代わり、野球で悩んでいることを伊達に告げた。淳は伊達に思いのうちのうちはなした。

「俺が野球が下手なせいでみんなの足引っ張ってる。この前もエラーしたし、バッティングも冴えない。俺なんか、いない方がチームのためにはいい。」

いんだ……」

その言葉を聞くと伊達は少し深刻そうな顔をしたが、急に真面目な顔になって前の地面を見ると言った。

「そうか。でも誰でもそんな時期はあるよ。前は、俺だつてそうだった」

「え？」

淳は伊達の顔を見る。

「俺は小学生の頃から野球やつてるが、中学になつて野球部に入つたときはレギュラーとれなくてさ。ふてくされて、練習にも出なくなつちまつた。俺なんか周りに迷惑掛けてるだけだ。いなくていい、いない方がいいって悩んだもんさ。」

伊達は話を続けた。

「でもさ、ある時気づいたんだ。自分が感じるほど、誰かはそれを構つちやいない。迷惑だなんて

思つてない。孤独感は自分が勝手に作つてただけなんだつて。」

伊達は淳のほうを見て微笑む。

「おまえの本当の悩みがなんなのか俺は知らない。だけどおまえも、あんまり意味ないことをいちいち気にしない方がいいよ」

淳は心の内を見透かされたようで驚きを隠せなかつた。

「お、なんかたくさん来たぞ。」

伊達がそう言うと、遠くから野球部の仲間たちが自転車で走り寄ってくる。

「ちーっす、淳、秀晃。二人で何やってんの」



「お二人さん熱いね」

「うるせえよ。」伊達は顔の前を手で払った。

「みんな集まったみたいだな。グダグダ言っ
てな
いで行くぞ。俺ほんと待たされたんだから。おま
えらもつと早く来い。——約束の時間は「二時
だ。もう「五分も過ぎてるぞ」

「堅いこと言うな。俺の時計では今「二時だ。
お、れ、の、と、け、い、では」

「ハハハ、それって狂ってんじゃねーか？」

別の自転車に乗っている仲間が笑いながら言う。

「いいの、いいの。今日は伊達のおごりでバイキ
ングだ〜！」

「誰がおまえらの分まで払うかよ」

さっきの男子が意味不明なことを言うと、伊達は
ぴしやりと言った。

「——淳も行こうぜ！」

淳のほうを振り向いた自転車の仲間が誘う。

「あ、ああ、俺は……」

淳は一瞬言葉を濁した。そのとき、一瞬伊達が目配せしたのに淳は気づいた。困惑する淳だったが、しかし淳はうなずいた。

「……ああ、行こう！」

それからはてんやわんやの大騒ぎで、皆パーティーをやる目的の店に向けて自転車を漕ぎ出した。仲間たちの自転車を追いかけて、淳も走り出す。

いつもと変わらない仲間たちが今、いる。

淳は折から吹く暖かい追い風を、背中に受けながら走った。皆楽しそうにふざけあいながら目的地を目指す。一足遅い春の息吹が、ようやく淳の心の氷柱を溶かそうとしていた。

###

Inspired by 『changes』 Base Ball Bear (EMI マスターズ・オブ・ジャパン)